



薰風風来

スワプナ

登場人物

登場人物表

| | | |
|---------|---------|-------------------|
| 早野 | カケル(17) | 転入生・高校三年生 |
| 菊池 | リサ子(17) | 登校拒否のクラスメイト |
| 芦田 | 義光 (18) | 番長的存在 |
| 水島 | 孝治 (17) | 風紀委員会 |
| 宮城 | 冴子 (17) | 生徒会副会長 |
| 石塚 | 勲 (40) | 担任・柔道部顧問 |
| 前島 | 孝男 (17) | 若葉寮々生 寮長 |
| 斎藤 | 信哉 (18) | 若葉寮々生 不良 |
| 武田 | 寛之 (17) | 若葉寮々生 不良 |
| 笠井 | 卓 (17) | メガネ 若葉寮々生 いじめられっ子 |
| 萩原 | 肇 (17) | 若葉寮々生 |
| 高峰 | 修一 (18) | 生徒会会長 |
| 大倉 | (17) | 風紀委員会・柔道部 |
| 三浦 | (18) | 風紀委員会委員長 |
| 櫻井 | 泰造 (48) | 叔父 |
| 櫻井 | 静子 (44) | 叔母 |
| 櫻井 | 朝子 (20) | 従姉・大学二年生 |
| 早野 | 涉 (9) | 弟・小学四年生 |
| 校長 | (58) | |
| 近藤 | (17) | 柔道部 |
| 田所 | (17) | 柔道部 |
| 宮部 | (17) | 柔道部 |
| 下宿のばあさん | (78) | |
| 教師 A | (48) | |
| 寮生 A | (17) | |
| 寮生 B | (17) | |
| 不良 A | (17) | |
| 不良 B | (17) | |
| 不良 C | (17) | |
| 業者 | (50) | |

○ xx駅・ホーム

列車が入ってくる。ドアが開き、数名の乗客が降りる。

ドアが閉まる瞬間、車内から手が出てドアをこじ開け、学生服の早野カケル（17）が降り立つ。

走り去る列車。

眠そうに大きなあくびをするカケル。

○ 同・表

改札を通り、カケルが出てくる。

風光明媚な町並。

○ 線路

広がる青い海。線路上を歩くカケル。

○ 川沿いの道

広がる田園風景。川をのぞくカケル。

川魚が泳いでいる。

○ xx神社

カケル、鳥居をくぐり長い石段を上る。

○ 同・境内

鬱そうとした境内。古びた社殿。

カケル、バッグを枕に木陰に寝転がる。

若葉が風にざわめく。鬱蒼と茂る木々。

枝葉に隠れる男子生徒（誰かわからない）と菊池リ子(17)。二人に気づくカケル。

やがて男子生徒が立ち去る。ピカピカの特徴ある革靴。

リサ子、カケルの方に歩いて来る。

上体を起こすカケル、リサ子の薄っすらと浮かべた涙に気づく。

リサ子、カケルに気づき足早に立ち去る。

○ 緑陰高校・校門（夕）

『緑陰高等学校』の看板。

○ 同・校庭

片付けをしている部活生たち。

○ 若葉寮・表

文字が消えかけた『若葉寮』の看板。

看板の下に大きな蛙の置物がある。

前島の声「届いた荷物は全部運んでおいたよ」

○ 同・二一三号室・前

部屋のドアを開ける寮長の前島(17)。

座卓がひとつ窓際にある。送られて来た荷物が片隅に置かれている。

前島「他にもまだ部屋はあまってるから、気に入らなかったら自由に代ってもいいよ。中には物置に

なったり、雨漏りがしたり、お化けが出るって噂の部屋もあるけどね」

部屋のドアを閉め、前島とカケル階下に向かう。

○ 同・階段

階段を下りる前島とカケル。

前島「トイレは一階と二階。こんなボロ寮だけど一応水洗だよ。二階一番奥の個室は水が流れない

から使用しないように。洗濯機は二階の洗面所に二台ある。いつ使おうと自由だけど、十一時

以降は使用禁止。物干しは裏庭にあるけど、みんな自分の部屋の中に干してる」

寮生の萩原(17)が勢いよく階段を駆け上がってくる。立ち止まる前島とカケル。

二人の横を駆け上がって行く萩原。

屋に入ったかと思うと、すぐに駆け下りて来て、そのまま寮を出て行く。

前島「今のは萩原君、彼は隣りの女子高生に夢中でこのところ忙しいんだ」

前島とカケル、階段を下りながら

前島「それから浴場は一階。前は沸かして入ってたけど、今は面倒だからみんなシャワーですまし

ている」

○ 同・食堂

前島とカケルが入ってくる。

前島「ここが食堂で、まあ談話室みたいなところだな」

テーブルで話してた寮生の斎藤(18)、武田(17)がカケルを睨む。

前島「(斎藤たちに)今日から入寮する早野カケル君だよ」

武田、吸っていた煙草をどんぶりにもみ消し立ち上がる。

斎藤、煙草の煙を吐き、立ち上がると、カケルを睨み、煙草を指ではじく。

はじいた煙草が金魚鉢に入る。

前島「ああ、またそんなこと」

斎藤と武田、食堂を出て行く。

前島、金魚鉢に入った煙草の吸殻を取りながら

前島「今のは斎藤君と武田君。一見不良っぽいけど、根は悪い人じゃないよ」

トイレの水の流れる音がして、寮生のメガネ(17)が出て来る。度の強い眼鏡を直し、そのまま食堂を出て行く。

前島「彼は笠井君。通称はメガネ。彼はこのところ腹の調子がよくないみたいだ」

前島、煙草の吸殻の入ったどんぶりを片付けながら

前島「今ので全員だよ。みんな君と同じ三年生だから、気を使うことないよ。俺は寮長の前島。

寮長

って言ったって肩書だけで別に何もしてないけどね。まあ、何かわからないことがあれば、遠慮

なく聞いてくれればいい。それから、食事なんだけど、若葉寮は自炊ってことになってるんだ。

もう一つ皐月寮っていうのがあるんだけど、頼めばそこで食えないこともない。でも俺たちは屈

辱的だから断っているけどね」

窓を開ける前島。少し離れた場所に大きな建物が見える。

前島「あれが皐月寮だよ。こことは違って嫌味なほど立派で設備も整っている。やつらはみんな優等

生でこのやつらは劣等生っていうことになっている。近いうち、この寮も取り壊されるとかいう噂

も聞こえてくる」

○ 緑陰高校・校内（翌朝）

登校する生徒たち。やって来るカケル。

掲示板に行事などのポスターが貼られている。

目を引く美化奉仕活動のポスター。

描かれた人物の絵が嫌に鼻につく。

○ 同・中庭

カケルが通りかかる。

創立者の胸像がある。見ると鼻が根元からきれいに欠けている。

○ 『校長室』プレート

○ 同・校長室

ソファに座っているカケル。

テーブルの向こう側に校長（58）と担任（40）の石塚が座っている。

校長「君が前の学校で暴力事件を起こして退学処分になったことは知っている。君にも君なりの言い

分があったかもしれないが、理由はどうであれ暴力は許されることではない。本当なら転入は認

められないところだ。しかし、心を入れ変えてやり直すという君の強い熱意に、真の学校教育を目

指す我が校も応えないわけにはいかない。この学園にも君のような不逞の輩がいる。ついこの間

も創立者の胸像が故意に壊された。そんなやつは見つけ次第退学にしてやるところだ。最初に言

っておくが、もし君が前の学校と同じようなことを起こせば即刻退学だ。チャンスは一度きりだ。同

じ失敗を繰り返すようでは人間として失格だ。そこのところを心して努力してほしい」

無反応のカケル。

カケルを冷たい目で見ている石塚。

○ 同・校舎廊下

教室へ向かう石塚とカケル。

石塚「お前がいずれ何かやらかすのはわかっている。俺としては、すぐにでも叩き出したいところだが、

そもいかないのが残念だ。お前の叔父さんに感謝するんだな」

『3年C組』のプレート。

教室のドアを開ける石塚。

○ 同・3年C組教室

石塚とカケルが入ってくる。

騒がしかった教室が静かになる。

教壇の石塚。少し離れて立つカケル。

石塚「転入生の早野カケルだ。若葉寮のやつはもう面識があると思うが、まあ、みんな仲良くやって

くれ」

石塚、カケルに顎で席を示す。

カケル、窓際の空いた席に歩いて行く。

冷やかな目で見るクラスメート。

悠々と座っている芦田(18)。

その様子を見ている水島(17)。

○ 同・校内

下校する生徒たち。行き交う部活生。

○ 同・体育館裏

斎藤、武田、不良A(17)、不良B(17)、不良C(17)に絡まれているカケル。

斎藤「前の学校で暴れたか知らねえが、あんまりいい気になるなよ」

カケル「別にいい気にはなってるねえよ」

武田「お前のそういう生意気な態度が気に食わねえって言ってんだよ」

カケル「これは生まれつきだ」

斎藤「二度とそんな口をきけねえようにしてやろうか」

斎藤、カケルに近づき胸倉を掴む。

睨み返すカケル。空気が張り詰める。

と、斎藤が前方に視線を移し、胸倉の手を緩める。

そこに、生徒会の高峰(18)、宮城冴子(17)。

風紀委員会の三浦、水島、大倉が立っている。

三浦「君たち、また問題起こす気か？ そのときはどうなるかわかってるんだろな」

斎藤「生徒会や風紀委員会にとやかく言われることは何もやってねえよ。俺たちはただ、こいつに前

いた高校での武勇伝を聞いてただけだ。話も終わったことだし、俺たちは今から帰るところだよ」

斎藤たち、バカにした態度で立ち去る。

○ 同・中庭

鼻の欠けた胸像。話をしている水島とカケル。

水島「ああいった連中はどこにもいるもんだよ。ただ、やつらの後ろには芦田っていうのがいて、そい

つが裏で糸を引いているんだ。いじめや恐喝、暴力、みんな芦田のせいだ。特に君は目をつけられ

てるみたいだ。気をつけた方がいい。大人しくしているのが身のためだ」

カケル「君は？」

水島「俺は皐月寮の水島。クラスメイトだし、困ったことがあればいつでも相談にのるよ」

水島、笑顔を残し去って行く。

○ 若葉寮・二一三号室（翌朝）

散らかっている部屋。布団を蹴散らして寝ているカケル。

前島が入って来てカケルを起こす。

前島「おい、早野起きろよ」

布団に包まるカケル。布団を剥ぎ取ろうとする前島。

○ 同・階段

前島が眠そうなカケルの腕を引いて下りてくる。

前島「ほら、しっかりしろ」

○ 同・食堂

前島に連れてこられるカケル。

斎藤の声「（荒げた声で）てめえら、どういうつもりだ！」

ビクッとするカケル。

寮生の前に、腕章をした風紀委員会の連中が立っている。

目をこすりあくびをするカケル。

三浦「この寮の裏で煙草の吸殻が何本か見つかった。今から、各部屋検査を行う」

武田「おめえらに何の権限があるってんだ！」

三浦「生活指導部からの指示だ」

金魚鉢の前に水島が立っている。

カケル「（前島に）彼も風紀委員なのか？」

前島「ああ」

水島、カケルの視線に気づき、しかたないというふうに小さく首を振る。

荻原「俺たちだって証拠はあるんだろうな？」

三浦「それを今から調べるんだ」

斎藤「ふざけるな！ 調べて違ってたらどうするんだ。おめえが責任とるのか？」

三浦「それは、何もなかったときに聞いてやる」

と、三浦が何かに気づいたように水島の方へ歩いて行く。

袖をめくり、金魚鉢に手を入れる。暴れる金魚。

寮生たち、不可解な三浦の行動を不安気に見ている。

金魚鉢から出したその手に何かある。

寮生に掲げて見せる三浦。その手に壊された胸像の鼻。黙り込む寮生。

○ 緑陰高校・校舎廊下

トイレの中からバケツの転がる音がして、後姿の生徒三人（宮部、近藤、田所）が走り去る

。
トイレの前で立ち止まり、三人を見送るカケル。

○ 同・トイレ中

水浸しの床に、ブリキのバケツが一つ転がっている。
水を流す音がして、個室からずぶ濡れのメガネが出てくる。
メガネ、バケツを片づけ、手を洗うと何もなかったように出て行く。
啞然として見ていたカケル、思い出したように小用を足す。
そこに芦田が入って来て、カケルの横に並ぶ。互いに黙ったままの二人。

○ 同・校内(夜)

あたりはすっかり暗くなっている。
部活を終え、下校する生徒たち。

○ 同・生徒会室表

生徒会室の明かりが消え、宮城冴子が出て来る。ドアの鍵を閉めて歩き出す。

○ 同・校内

校舎の明かりは消え、誰の姿もない。
一人足早に歩く冴子。
突然、斎藤と武田が立ちはだかる。

○ 同・体育館裏

冴子の腕を掴み、強引に連れて来る斎藤と武田。
冴子「どういうつもり！」
斎藤「お前らの悪企みはわかってる。だから俺たちも早く何か手を打たないとな。だからあんたにも
ちょっと協力してもらうことになる。そういうわけだから悪く思うなよ」
冴子「バカなこと言わないで」
武田「いい機会だから、その強い鼻っ柱をへし折ってやるよ。少しは女らしくなるだろう」
逃げ出そうとする冴子を、武田がつかまえ、制服を引き裂く。
制服とシャツのボタンが飛んで、倒れ込む冴子。
かけていたメガネが落ち、胸元から白いブラが見える。
冴子「こんなことしてただですむと思ってるの！」
斎藤「プライドの高いあんたが、こんな恥ずかしいこと誰にも言えるわけねえだろ。すぐにそんな大口
も叩けないようにしてやるよ」

座り込んだままあかずさる冴子。

迫る斎藤と武田。

そのとき、大きな音がする。驚く斎藤と武田。

見ると、塀を乗り越え飛び降りたカケルが手をパンパンと払っている。

斎藤「何やってんだお前？」

カケル「(斎藤たちに気がついて) 何って、この塀を越えると近道なんだ」

武田「そんなところ乗り越えんじゃねえ、今取り込んでんだ。さっさと消えろ」

カケル、冴子と斎藤たちを交互に見て

カケル「そうはいかないよ。これはどう見ても見過ごしにはできないよ。俺としてはあまりかわりた

くないんだけど」

斎藤「じゃあ、かかわるんじゃねえ」

カケル「だからそうはいかないって言ってんだよ」

武田「この野郎！」

武田、不意にカケルを殴る。

鼻を押さえ二、三步後ろによろけるカケル。

斎藤「やめとけ」

武田を止める斎藤。

斎藤「余計なことしやがって、お前、後で後悔するぞ」

武田、口惜しそうに、斎藤を振り払い

武田「クソー、てめえおぼえてろよ！」

斎藤「(冴子に) 今日は邪魔が入ったが、お前らのいいようにはさせないからな」

去って行く斎藤と武田。

殴られた鼻を気にしているカケル。

冴子、落ちたメガネを拾う。

意外に、素顔が美人の冴子にドキっとするカケル。

メガネをかけ直し立ち上がる冴子。

冴子のはだけた胸元に気づき、学生服を脱いで、渡そうとするカケル。

冴子、無視して

冴子「助けたなんて思わないで！ こんなことくらい、あなたが来なくても何とでもできたわ！」

走り去る冴子。

○ 緑陰高校・校内

胸像の欠けた鼻を直している業者(50)。

後ろでその作業を見まもる校長。

○ 同・校舎廊下

騒がしく行き交う生徒たち。

トイレから、濡れた手をズボンで拭きながら出てくるカケル。

階段から走り去る男子生徒三人の後姿（宮部、近藤、田所）。

カケル、気になって階段の踊り場を見ると、メガネが倒れている。

メガネ「踏み外しちゃった」

手を貸すカケル。

ふと振り返ると、壁からのぞいていた宮部、近藤、田所の顔がすっと隠れる。

階段を上っていくメガネ。

チャイムが鳴る。

○ 同・3年C組教室

教室に入るカケル。

席に座っている芦田に近づいていく。

その様子を見ている水島。

カケル、芦田の耳元に何か語りかけ、自分の席に着く。

微動だにしない無表情の芦田。

○ 同・校内

放課後。三々五々に下校する生徒たち。

芦田、校門を出ていく。

○ xx神社・階段(夕)

鳥居をくぐり、石段をのぼる芦田。

○ 同・境内

カケル仁王立ちで待っている。

カケル「逃げださずに来たことだけはほめてやる」

芦田「話ってなんだ」

カケル「俺はお前みたいな卑怯なやつが一番嫌いなんだ！」

芦田「そう言われても何のことかわからねえな」

カケル「それじゃあ、思い出させてやるよ」

カケル、いきなり芦田に殴りかかる。

逆に芦田に殴られるカケル。

× × ×

木々の若葉が揺れ、星が瞬いている。

仰向けのカケル、くしゃみをする。

リサ子の声「生き返った？」

社殿に菊地リサ子が座っている。

痛々しく身体を起こすカケル。

カケル「お前、どこかで見たな。誰だ？」

リサ子「クラスメイト」

カケル「クラスにお前みたいなのいたか？ ぜんぜん気づかなかったな」

リサ子「気づくわけないよ。ずっと学校さぼってるから」

カケル「……」

リサ子「大丈夫？」

カケル「ああ」

リサ子「彼にかなうわけないわよ。それよりあんたケンカ弱すぎ」

カケル「やつは？」

リサ子「もうとっくに帰ったわよ」

カケル「お前、ずっとここにいたのか？」

リサ子「伸びてる人、ほっとけないでしょ」

立ち上がり、土を払うカケル。

リサ子「あんた、芦田くんのこと誤解してんじゃないの？ あの人、悪い人じゃないよ」

カケル「……」

リサ子「歩いて帰れる？ 私、送って行かないからね」

カケル「そんなこと頼まないよ」

石段を下りて行くカケルとリサ子。

- 緑陰高校・校門（朝）
登校してくる生徒に、頭髪と服装検査をしている風紀委員の三浦、大倉、水島。
- 同・校内掲示板前（朝）
掲示板の美化奉仕活動のポスター。
登校して来るカケル。
- 同・中庭
歩いて来るカケル。
見ると胸像の鼻が直されている。
異様に高い鼻。どこか校長に似ている。
- 同・3年C組教室
静まり返っている教室。
クラスメイトがカケルの腫れた顔をチラチラ見ている。
いつもと変わらない芦田。
そんな様子を見ている水島。
カケルを冷たく一瞥する石塚。
石塚、出席簿を開き
石塚「出席をとるぞ」
出席をとる石塚。返事をする生徒。
- 同・食堂
昼食をとっている生徒たち。
カケル、窓口に食券を出す。
水島、大倉、宮部、近藤、田所が談笑している。
トレイを持ってその前に立つカケル。
水島たちが話をやめ、カケルを見る。
カケル「いっしょにいいかな？」
水島「（ニコツとして）どうぞ」
カケル、水島の前に座る。
カケル「聞きたいことがあるんだ」
水島「俺にわかることなら答えるけど」
カケル「クラスに登校拒否の女子生徒がいると思うんだけど……」
水島「菊池リサ子のことか。彼女がどうかした？」

カケル「なぜ来ないのかなって、ちょっと気になって」

水島「（ニヤツとして）いずれ君の耳にも入るだろうから言うけど、彼女が学校に来ないのは、妊娠し

て子供を堕したからだって言われているよ。今までにも喫煙、万引き、不純異性交遊とか、い

ろいろ問題起こしている生徒なんだ。家庭環境もよくないみたいだね。くわしくは知らないけど

母一人子一人の母子家庭で、母親は水商売をやってるって聞いたよ」

水島、ニコッと笑って立ち上がり

水島「それじゃ、お先に」

トレイを持って行く水島たち。

○ xx神社・境内（夕）

リサ子が石段を上って来る。

リサ子「あっ」

社殿の階段にカケルが座っている。

○ 海辺（夜）

空にいくつもの星。波の音が繰り返す。

カケルとリサ子が砂浜を歩いて来る。

リサ子「私の母親はね、十七で私を生んだんだ。女手一つで私を育ててきたの。私、生んでくれた事、

感謝してるわ。父親がいないとか、水商売だからって、変な目で見ると人もいるけど、全然気

になんかしてないわ。彼女は私にあれこれ干渉しないし、ありがたく思ってる」

カケル「神社にいたの、……誰だ？」

リサ子「あんたケンカ弱いくせに、またお節介しようっていうの？」

カケル「……」

砂浜に座るリサ子。横に座るカケル。

リサ子「あんた、生きるのヘタクソね。要領悪いし、無駄なことばかりやってる。そんなんじゃこの世の

中うまくわたっていけないよ」

カケル「……」

リサ子「私はあの人のこと恨んでなんかないわ。あの人が、本当はかわいそうな人なのかも知れない」

大きく息を吐き、空を見上げるリサ子。

リサ子「この星空見てたらみんなちっちゃく思えてくるわ。まわりをかき乱して、自分だけいい

思いしよ

うなんて私にはできない」

カケル「……」

リサ子「あんた泳げる？」

カケル「え？」

リサ子「私はあまり得意じゃないわ。こんな暗い海で、もし波にさらわれたりしたら間違いなく溺れちゃう」

カケル「……そのときは助けてやるよ。泳ぎは得意だし」

リサ子、カケルの真剣な顔に吹き出し

リサ子「何まじめな顔してんのよ。あんた硬すぎよ」

カケル「……」

沈黙の中、波の音だけがしている。

リサ子「（いたずらっぽい目で）あんた童貞でしょう？」

目が泳ぐカケル。笑い出すリサ子。

無然とするカケル。

○ 緑陰高校・3年C組教室

休み時間。

前島と荻原がカケルを囲んでいる。

少し離れた席に座っているメガネ。

前島「校長は犯人を見つけ出そうと、異常なほどの執念を燃やしてたはずだ」

荻原「何しろあの胸像は校長のひいじいさんだからな。気持ちはわからんでもない」

前島「それならなお更だ。容疑者である俺たちに、捜査の手が伸びてこないのには何かあるはずだ。

お前、何を知ってるんだ？」

荻原「胸像の鼻を壊した犯人が名乗り出たんだ」

前島「犯人？ それは誰だ？」

荻原「芦田だよ」

カケル「……」

前島「バカ言え。鼻が壊されたのは、芦田が若葉寮を退寮した後だ。どうやって金魚鉢にそれを入れ

るんだよ。第一何のためにそんなことするんだ？」

荻原「事実はどうあれ、追い出したかった芦田が、自ら名乗り出たんだ。校長にとってそんなことはど

うでもいいんだ。これは願ってもないことだ」

カケル、そっと芦田の席を見る。

芦田と斎藤と武田がしゃべっている。

石塚が入って来て

石塚「芦田、ちょっと来い」

芦田、席を立ち教室を出て行く。

○ 同・食堂

一人で定食を食べているカケル。

メガネがトレイを持ってその前に座る。

無視し、黙々と食べつづけるカケル。

メガネ「胸像の鼻を金魚鉢に入れたのは芦田君じゃないよ」

無言で食べつづけるカケル。

メガネ「僕見たんだ。風紀委員の抜き打ち検査のとき、水島君が金魚鉢にそれを入れるところを」

カケル、ちらっと上目にメガネを見る。

○ 同・校内

下校する生徒たち。校門を出るカケル。

メガネに近づく宮部、近藤、田所。

宮部「おいメガネ、ちょっと顔かせよ」

メガネを強引に連れて行く宮部たち。

○ 同・体育館裏

宮部たちに連れられて来るメガネ。

そこに水島と大倉が現われる。

水島「メガネ、胸像の鼻を壊したのは俺だとか言ってるらしいな。根拠のないことを言いふらすのは

よくないんじゃないか？ （にやっと笑って）それとも何か見たとでもいうのか？」

○ 芦田の下宿・表（夜）

木造二階建ての一軒家。

玄関に明かりが点っている。

○ 同・階段

下宿のばあさん(78)がお茶と茶菓子をお盆で持って、階段を上がって行く。

ばあさん、襖をあけ部屋に入る。

○ 同・芦田の部屋

殺風景で飾り気のない部屋。

無言で向かい合うカケルと芦田。

ばあさん「（にっこり笑い）どうぞ」

カケル、小さく頭を下げる。

ばあさん、部屋を出て行く。

芦田「何のようだ？」

カケル「どういうつもりだ？」

芦田「何のことだ？」

カケル「胸象の鼻のことだ」

芦田「お前には関係ない」

カケルと芦田、互いに睨み合う。

カケル「菊池リサ子の件でもそうだ。お前は彼女の悪い噂を流し、嫌がらせをしてたやつをボコボコに

した。表沙汰にはならなかったが、お前は寮生に迷惑がかからないよう自分から若葉寮を出た、

違うか？」

芦田「そいつを殴ったのは俺の陰口を言ってたからだ。寮を出たのは共同生活が息苦しく嫌になった

からだ」

カケル「カッコつけんじゃねえよ。俺はおめえみたいにヒーローぶったやつが大嫌いなんだよ」

芦田「お前にとやかく言われる筋合いはない。すべてお前には関係ないことだ。俺は自分の好きにや

ってるだけだ」

カケル「じゃあ、今回のことはどうだ。寮生でないお前に、壊した胸像の鼻を水槽の中に入れられるわ

けない」

芦田「鼻を壊したのはお前だろうと訊かれたから、めんどくさいからそうだと答えたまでだ。俺を疑って

いるようだったしな。学校を辞めようと思ってたところだから、おれにとってはちょうどよかったんだ」

カケル「……」

黙り込む二人。階下で電話が鳴る音。

電話のベルが止み、しばらくして

ばあさんの声「（階下から）芦田さん！ 電話！」

立ち上がり部屋を出て行く芦田。

一人残されるカケル。

静寂に包まれる殺風景な部屋。

しばらくして階段を上ってくる音。襖が開き、芦田が入ってくる。

芦田「メガネが殴られて怪我したみたいだ」

勢いよく部屋を出て行くカケル。

○ 若葉寮・表

『若葉寮』の看板と蛙の置物。
駆け込んで行くカケル。

○ 同・食堂

カケル、息を切らして入ってくる。
メガネを除く寮生みんなが集まっている。

カケル「メガネは？」

前島「部屋で横になってるよ」

カケル「怪我はひどいのか？」

斎藤「けっこうやられたみたいだ」

カケル「誰の仕業だ？」

武田「それがあいつ言わねえんだ」

荻原がドタドタと駆け込んで来る。

荻原「（息を切らし）メガネが柔道部の宮部のやつらに連れて行かれるの見たやつがいる」

斎藤「風紀委員会の大倉も柔道部だ。大倉や宮部たちは水島ともつるんでいる。主犯は水島だ」

カケルが出て行こうとすると

メガネの声「行っちゃあダメだよ」

メガネが壁をつたって入ってくる。

前島「メガネ、大丈夫かよ」

メガネ「今行くと彼らの思う壺だよ」

カケル「仲間がやられて黙ってられねえだろ。後先のことなんか考えてられねえ」

食堂を出て行くカケル。続く寮生たち。

いつの間にかやって来ていた芦田が、その様子を傍らで見ている。

○ 同・玄関

メガネ、カケルを止めながら

メガネ「何にしても暴力はよくないよ」

カケル「いつまでビビってるんだ！ そんなこと言ってるから舐められるんだ！」

メガネを振り払って行くカケル。そのとき置物の蛙が転がり頭が取れる。

○ 緑陰高校・校庭

歩いて行くカケルたち。

暗闇に立つ人影にカケルたち足を止める。正面に宮城冴子が立っている。

冴子「退学になりたいの？」

カケル「なにより優先しなきゃいけないこともあるんだ」

冴子の前を歩いて行くカケルたち。

冴子「やっぱり、救いようのないバカだわ」

振り返りカケルたちを見送る冴子。

○ 皐月寮・外観

ほとんど部屋の明かりが点いている。

○ 同・玄関

『皐月寮』の立派な看板。

カケルたち、ためらわず入って行く。

カケルたちに遅れてやって来たメガネ、皐月寮の前で立ち尽くす。

○ 同・中

土足で進んで行くカケルたち。

カケル「やつの部屋はどこだ？」

斎藤「四一五号室、四階だ」

集まってくる皐月寮々生たち。

寮生A「お前ら、どういうつもりだ！」

カケルたち取っ組み合いになる。

強引に二階へ進むカケルたち。

カケルたちに遅れて悠々と歩いて行く芦田。皐月寮々生、芦田を恐れ誰も手を出せない。

○ 同・表

メガネ、覚悟を決め皐月寮に入って行く。

○ 同・食堂

厨房を取り囲む皐月寮々生。

厨房の中の前島、キャベツ、たまねぎなど、あたりかまわず投げまくる。

たじろぐ寮生たち。

前島がコショウを投げ巻く。

くしゃみで苦しむ寮生たち。

○ 同・階段

寮生にとり囲まれる荻原。

荻原、消化器を取り、撒き散らす。

あたりが真白になり咳込む寮生たち。

○ 同・二階廊下

こっそりやって来るメガネ。

そっと後ろを見るメガネ。誰もいない。

再び前を向くメガネ。大勢の寮生が仁王立ちしている。驚き逃げ出すメガネ。

追って来る寮生。メガネ、トイレに逃げ込む。

○ 同・二階トイレ中

個室のドアを開け、逃げ込むメガネ。

その個室を取り囲む寮生たち。

寮生B、勢いよくドアを開け、入ろうとした瞬間、何かに怯えたように動かなくなる。

そして両手を上げ、後ろ向きに下がって来る。

顔に恐怖を浮かべ、あとずさる寮生。

トイレから、通水カップを手にしたメガネが出てくる。

○ 同・四階廊下

上がってくるカケルたち。

斎藤「あそこだ」

『四一五』のプレート。

カケル、乱暴に部屋のドアを開ける。

○ 四一五号室・中

明かりが消えている。スイッチを入れるカケル。誰もいない。

前島「まだどこかにいるはずだ」

消火器を抱えた荻原と、通水カップを持ったメガネが合流する。

○ 同・四階廊下

屋上への階段に気づき、歩いていくカケル。みんなカケルに続く。

寮生を通水カップで牽制するメガネ。

○ 同・屋上への階段

上って行くカケルたち。

カケル、ドアを開ける。

○ 同・屋上

洗濯物が風にパタパタ鳴っている。

屋上に出るカケルたち。

水島「よくここまで来られた。ほめてやるよ」

そこに水島、大倉、宮部、近藤、田所が待っている。

開けられそうになったドアを前島が抑える。

荻原とメガネが、洗濯ひもでドアのノブと鉄柵を縛り付ける。

ドアを内側から激しく叩く音。

カケル「水島、ただじゃおかねえからな、覚悟しろよ」

水島「それはこっちのセリフだ。芦田にも借りがあるからな。三倍にして返してやる」

動ずることなく平然としている芦田。

水島「そう言えばお前ら、菊池リサ子と仲がよくな。あのアバズレ、ああ見えて結構かわいいところ

もあるんだぜ。（手紙を取り出し）ほら、あいつの書いたラブレターだ。来てくれるまで毎日待って

ますだって……。気持ちわりい。読んで聞かせようか？」

手紙を広げようとした水島を、いきなり殴りつけるカケル。

全員が入り乱れ乱闘がはじまる。

ドアが内側から叩きつづけられている。なんとか耐えている洗濯ひも。

カケルを殴る水島。殴り返すカケル。

芦田が大倉を殴る。

宮部に飛び蹴りを決める斎藤。

武田に馬乗りになる田所。

近藤に投げられる荻原。すかさず近藤の顔に生卵を押し付ける前島。

続いて近藤の顔に通水カップを押し付けるメガネ。

強引に開けられようとしているドア。

乱闘をつづける両軍。

石塚の声「おい、そこまでだ！」

その声により、乱闘を止める。

洗濯ひもが切れ、ドアが開いている。

皐月寮々生がのぞき込んでいる。

なおも馬乗りで水島を殴り続けるカケル。

その振り上げた拳を掴む石塚の手。

石塚「いいかげんにしろ！」

白目を向いてのびている水島。水島の股間が濡れている。

○ 緑陰高校・生徒指導室（翌日）

テーブルを挟み、向かい合って座っているカケルと石塚。

石塚「何か言いたいことはあるか？」

石塚、煙草に火をつけ煙を吐く。

カケル「俺が首謀者ですよ。他のやつらは俺を止めようとしただけです」

石塚「芦田も同じ事を言ってたな。まあ、安心しろ。お前ら二人そろって退学だ。所詮クズはクズだ

ってことだ」

カケル「……」

石塚「お前も芦田も若葉寮のやつらも、ほんとにみんな、どうしようもないクズだな。少しはクズ掃除

する身にもなれ。まったくお前らの親の顔が見てみたいもんだよ。……と、言ってもお前にはい

なかったか。病弱な弟と二人きりだったな」

カケル「（怒りをこらえ）……」

石塚「しかしそんなの同情を引く要素にはならない。世の中にはもっと不幸な人がいっぱいいる。

こんなクズを引き取った叔父夫婦も底抜けのバカだよ」

カケル「（勢いよく立ち上がり）石塚てめえ、表へ出ろ！ ぶっ殺してやる！」

石塚、微動だにせずカケルを仰ぎ見て

石塚「それがお前の本性か？ 教師の俺が、生徒のお前なんか相手にケンカできると思うか？」

カケル「（声を押し殺し）おめえ、柔道部の顧問だったな、なら勝負しろ」

石塚「（にやっと笑って）お前や仲間をクズ呼ばわりしたことに腹を立てたか。それとも弟や叔父夫婦

のことを言ったのが気に入らなかったのか。いいだろう。俺がお前のその甘ったれた根性を叩き

直してやる」

立ち上がる石塚。

○ 同・柔道場

柔道着の白帯のカケルと黒帯の石塚が向かい合っている。

石塚「さあ、殴って来るなり、蹴って来るなり好きなようにやって来いよ」

カケル、勢いよく石塚に組み付く。技をかけようとするがびくともしない。

石塚「なんだ、バカ正直に柔道する気か？ほんとにバカだな。それじゃ、百に一にもお前に勝ち目

はないぞ」

石塚、カケルを勢いよく投げつける。

すぐさま立ちあがり、組み付き投げようとするカケル。

反対にカケルを投げ返す石塚。

投げられては立ちあがり、投げられては立ち上がるカケル。

× × ×

窓の外に揺れる若葉。

カケルを投げる石塚。ふらふらになりながら立ちあがるカケル。

石塚も息を切らし、汗が流れ落ちる。

石塚「お前はその程度なんだよ。無駄な高望みをせず、クズはクズにふさわしい居場所を探せ」

カケル、石塚に組み付く。

石塚が投げようとするところをしがみついて耐える。

気合と共に発したカケルの裏投げが決まる。

驚いた表情でカケルを見る石塚。肩で息をしているカケル。

石塚の目の色が変わる。

カケルに組み付き、狂ったように投げつづける石塚。

石塚「なめるんじゃねえ！ おら、なんとか言ってみろ！ 言いたいことがあれば言ってみろよ！

何も言えねえだろうが！」

カケル、ありったけの力で石塚を壁まで押し返していく。

石塚、押し返そうとするが、カケルが踏ん張って押し返せない。

カケル「俺はわかんねえことだらけだけど、これだけは今はっきり言ってやる。俺はあんたたちみた

いな大人には絶対ならねえ！」

石塚「上等じゃねえか！」

石塚、カケルを押し返す。

石塚「そんなこといつまで言われると思ってるんだ。十年、二十年先、今と同じことを言っ

ていられたらほめてやるよ。だがもしそうなら救いようのないバカだがな」

石塚、カケルを力いっぱい投げる。

投げられたままの荒い息のカケル。

はたけた道着で肩で息をする石塚。

石塚、帯を外し、柔道場を出て行く。

大の字に倒れたままのカケル。

○ 緑陰高校・校内（夜）

暗闇で怪しげな音（胸像の首をのこぎりで切る音）。

懐中電灯の明かりだけがチラチラ行ったり来たり動いている。

複数名(若葉寮々生)が何やら作業をしている。

斎藤の声「何か子供っぽくねえか？」

カケルの声「嫌なら帰れ。手伝ってくれと頼んだおぼえはない」

前島の声「わかったよ。まったく」

怪しげな音。動く懐中電灯の明かり。

○ 緑陰高校・校内（翌朝）

すがすがしい早朝。散策する校長。

○ 同・校内・掲示板

歩いて来る校長。

校長、掲示板のポスターに目をやる。

美化奉仕活動の人物の絵に違和感がある。

不自然な鼻に恐る恐る手にやる校長。付いていた物体がポコっととれる。

それをまじまじと見る校長。それが胸像の鼻だとわかり、校長の顔が見る見る変わっていく

。

○ 同・中庭

胸像の鼻を持って、走って来る校長。

校長「（悲痛な叫び）ああああ！」

胸像の頭が蛙にすげ返られている。

生徒たちの笑い声。

芝生があっちこっち掘り返され、どろどろの田んぼ状態になっている。

盛り上がったところに何かがある。

よく見ると置物の蛙の胴体に、鼻の欠けた胸像の頭がつけられている。

集まって来た生徒たちが笑う。

校長「（驚愕し）だ、誰だ！ こんなことをしたやつは！（教師Aに）早く何とかしなさい」

教師Aがどろどろの芝に入っていく。と、突然その姿がスッと消える。

何が起こったかわからず目をパチクリさせる校長。

地面から泥だらけの顔を出す教師A。

校長「お、落とし穴？」

石塚の声「まったくくだらない」

いつのまにか校長の横に石塚がいる。

面白がって騒ぐ生徒たち。

校長「（生徒たちに）君たちは、早く教室に行きなさい」

行くふりして戻って来る生徒たち。

石塚「まったく、こんなにしやがって」

石塚、土を盛った部分を歩いて行く。

校長「気をつけてくださいよ、石塚先生」

石塚「こんなものちょっと頭を使えばなんてことないですよ」

ひときわ土が盛られたところに、飛んで着地したとき、石塚の姿が消える。

少しして泥だらけの石塚が顔を出す。

○ 同・校内

生徒たちの笑い声が遠くから聞こえてくる。

校長の声「（怒鳴って）君たちは教室に行きなさい」

高峰と宮城冴子が様子を見ている。

バッグを持ったカケルと若葉寮々生たちがやって来る。

高峰「君はいつも面白いことをやってくれるね」

カケル「そんなつもりはないんだけど」

高峰「何か忘れ物でもしたのかい？」

カケル「そうなんだ。言い忘れていたことがあったんだ、あんたに」

高峰「俺に？ 言い忘れてたって……」

カケル、いきなり高峰を殴りつける。

倒れる高峰。鼻を押さえたその指の間から血が流れ落ちる。

ピカピカの特徴ある革靴を履いている高峰。

高峰「（目の色を変え）いきなり何なんだ！」

カケル「いつも冷静沈着な生徒会長が、感情的になって取り乱すのをはじめて見たよ。あんたには人の痛み

なんてわからないだろう。だから、そいつを教えてやろうと思ったんだ」

高峰「バカなこと言うな。こんなことしてただで済むと思ってんのか！」

カケル「好きなようにやりなよ。やれるもんならね。でも困るのはそっちだと思うよ」

きびすを返し立ち去るカケルたち。

高峰「（鼻を気にしながら）クソー、あいつただでおかないぞ」

そっとハンカチを差し出す冴子。

ハンカチを受け取ろうとした高峰、冴子の笑いをこらえた表情に驚き手を止める。

カケルの後姿を見送る冴子。

○ 同・校門

前島、斎藤、武田、萩原、メガネがカケルを見送っている。

斎藤「けっこう楽しかったぜ」

前島「駅まで見送りにいけないからここでお別れだ、じゃあ元気でな」

カケル「ああ、そっちもな」

カケル、去っていく。
手を振る若葉寮々生たち。

○ xx神社・石段

石段を上がるカケル。

○ 同・境内

やって来るカケル。誰もいない。
鬱蒼とした木々。
もと来た石段を下りるカケル。

○ 川沿いの道

広がる田園。のんびり歩くカケル。
のぞき込む川に魚が泳いでいる。

○ 線路

広がる青い海。線路を歩くカケル。
ふと前方を見ると、両手を広げ行く手を遮るリサ子が見える。
リサ子、にっこり笑う。

○ 海辺

カケルとリサ子、並んで立っている。
穏やかな海。波音が静かに繰り返す。
カケル、クシャクシャの手紙を出し

カケル「読んでないぜ」

リサ子、それを受け取り破り捨てる。

リサ子「昼と夜は全然ちがうね。これなら私でもなんとか泳げそうだわ」

カケル「……」

リサ子「あんたのこと、タイプじゃないけど、私、好きだと思う」

カケル「ややっこしい言い方だな」

リサ子「あんたと知り合えてよかった」

手を差し出すリサ子。

カケルがその手を握ると、ギュッと強く握り返すリサ子。

カケル「（痛がって）痛て！」

リサ子、カケルにハグする。

リサ子「ありがと」

驚きうろたえるカケル。

リサ子「（にこっとして）やっぱり童貞だ」

カケル「……」

リサ子「それじゃ、元気で」

カケル「ああ、おまえも」

微笑んで走り去るリサ子。

○ 駅・ホーム

ホームに列車がやって来る。

ドアが開き、乗り込むカケル。

○ 列車・内

荷物を荷台に置き、座席に座るカケル。

動き出す列車。流れる風景。

野原にポツンとひとり人が立っている。

目を凝らして見ると芦田だ。

その姿はすぐに見えなくなる。

カケル、ニコッとして深く座席にもたれる。

○ 叔父の家・庭

従姉の桜井朝子(20)が手招きをする。

カケルの弟の渉(6)が足を忍ばせて朝子の方へ歩いて行く。

渉から離れないパグ犬。

○ 同・座敷

叔父(48)の前に正座しているカケル。

叔母(44)がお茶をお盆で持ってくる。

無言でカケルを見る叔父。

目を反らさず見返すカケル。

叔父、立ち上がり出て行く。

カケル、叔父の背中に深々と頭を下げる。

叔母、高校の案内書をポンと置き

叔母「カケル、あなたケンカ強くないんだから、無茶だけはしないでね」

カケル「(申し訳なさそうに) ごめんなさい」

朝子と渉が入って来る。

朝子、案内書を手に取ってながめ、

朝子「おかあさん、そんな甘いこと言ってるからつけあがるのよ。カケル、あんた、いったい何
度退学

になれば気がすむのよ。今どき暴力で解決しようなんて野蛮だよ。あんたはそれでいいかも
知

れないけれど、少しは頭を下げる方の身にもなったらどうなの？」

カケル「わかってるよ」

朝子「ほんと名前通り、あんたはどっか欠けてんだから」

○ △△駅・ホーム

列車の窓から顔を出しているカケル。

ホームで見送る朝子、渉、パグ犬。

朝子「ほら、あんたに来てたよ」

カケルに手紙を渡す朝子。

カケル「お前ら学校はいいのかよ」

朝子「渉は創立記念日で休み。私は今日の講義は午後からなの」

カケル「渉、身体気をつけるよ」

渉「大丈夫だよ。ここのところ咳も出ないし調子いいんだ」

カケル「朝子にいじめられたらすぐ言え」

涉「そんなことより、今度は嫌なことがあっても我慢するんだよ」

カケル「そんなことわかってるよ」

朝子、カケルに包みを渡し、

朝子「これ、お母さんが、車内で食べなさいって」

カケル「（受け取って）ああ、ありがと」

汽笛が鳴り列車が動き出す。

朝子「今度はすぐに帰って来るんじゃないよ」

ホームから小さく手を振る朝子と涉。

○ 列車・内

窓から景色を見ているカケル。

まばらな乗客。あくびをするカケル。

齋藤の声「元気か？ といつてもつい先日別れたばかりだがな。その後も学校は相変わらずだが

、

多少の変化があったので報告する」

○ 緑陰高校・中庭（イメージ）

直された芝。首と鼻を直された胸像。

齋藤の声「自慢の中庭も元通りに直され、胸像のあの不愉快な鼻と頭もなんとかくつつけられた

。

校長はお前を思い出すのか、胸像を見るたびに悔しそうに歯がみをする」

胸像をながめている校長。思い出したように顔をしかめる。

○ 同・3年C組教室（イメージ）

教壇で怒っている石塚。

齋藤の声「担任の石塚は何かあるとお前の名前を出し、お前は最低の人間だと声を荒げている。

お前の落とし穴にはまったことがよほどの屈辱だったとみえる」

○ 同・生徒指導室（イメージ）

机に足を乗せている齋藤と武田。

居眠りをする荻原。寛いでいる前島。窓の外を眺めるメガネ。

齋藤の声「俺たちは、朝から夕方まで、指導室で反省文を書かされている」

突然、ドアが開き、石塚が入ってくる。あわててみんな座り直しテーブルに向かう。

○ 同・職員室（イメージ）

すみで座禅を組む齋藤ら若葉寮々生。

みんな集中力がなくなっている。

齋藤の声「それから職員室の片隅で坐禅なんかを組まされたり」

武田が大きなあくびをする。

石塚が来て、大きな定規で頭を叩く。

○ 同・男子トイレ（イメージ）

ガラガラと掃除をする齋藤ら若葉寮々生。

齋藤の声「石塚監視のもと、全校舎のトイレ掃除などをやらされている。残念ながら男子トイレのみだ」

ドアが開き、石塚がのぞく。

まじめに掃除をしだす若葉寮々生。

○ 同・校内（イメージ）

校内で服装検査をする風紀委員会。

齋藤の声「風紀委員会は、言うまでもなくおとがめなしだ」

高圧的に服装検査をしている水島。

齋藤の声「水島のやつも相変わらずだ。ただ、お前にのされてしょんべん漏らしたことを隠そうと必死

になっている。残念ながらもうかなり知れ渡っているのだが……。どうやらあいつ、菊池リサ子に

告白したことがあるようだ。あっさりふられたことを根に持って、嘘の噂を流したり、嫌がらせをし

てみたいだ」

登校してくる生徒たちが水島を見てクスクス笑っている。気になる水島。

風紀委員会の服装検査を離れて見ている高峰。

齋藤の声「生徒会長の高峰は、お前に殴られたのがこれまでになく悔しかったようだ。親にも手を上

げられたことがなかったという話だ。殴られた鼻がいまだにうずいて、その度に忌々しいお前の

顔が浮かんでくるらしい」

鼻をこする高峰。そして不快な表情を浮かべる。

そんな様子を見ている冴子の後姿。

齋藤の声「副会長の宮城冴子は前のようなとっつきにくさがなくなった。よくはわからないが、俺たち

が退学を免れたのは、彼女のおかげもあるみたいだ。それから、どういうわけか向こうから『おは

よう』って挨拶してきた。俺はその見たことのない柔和な笑顔に、腰を抜かすほど驚いた。別人

のように表情が軟らかくなったのは、あの高圧的な眼鏡を換えたせいじゃないだろうか。おれが

思うに、彼女、メガネを取るとかなりの美人だぞ」

登校する若葉寮々生。

振り返り、笑顔で挨拶をする丸みある眼鏡をかけた冴子。

その魅力的な笑顔にどぎまぎする寮生たち。

○ 草原（イメージ）

誰もいない草原。青い空が広がる。風が草を揺らす。

斎藤の声「それから芦田のことだが、おれたちにも黙って去っていった。彼が下宿を出てから連絡は

とれていない。彼らしいといえば彼らしい。たぶん芦田の方から連絡してくることはないだろう。

芦田がこれからどうするかはわからないが、まあ、彼のことだから、嘘偽りなく、自身の切り開

いた道をまっすぐ進んでいくことだろう」

芦田、バッグを肩にして一人歩いていく。

○ 緑陰高校・3年C組教室（イメージ）

騒がしい教室にリサ子が入ってくる。水を打ったように静まり、みんなが彼女に注目する。

斎藤の声「菊池リサ子は学校に戻って来た。クラスメイトの目はまだ冷ややかだが、彼女はそんなこ

と気にすることなく明るく振舞っている。もちろん言うまでもなく俺たちは彼女の味方だ」
周囲を気にせず席につくりサ子。

○ 若葉寮・表（イメージ）

『若葉寮』看板。直された蛙の置物。

○ 同・食堂（イメージ）

斎藤と武田にお茶を入れる前島。

トイレから出て来るメガネ。

前島が声をかけるが、そのまま食堂を通り抜けて行く。

荻原が入って来て、前島のお茶を勝手に飲み干すと、慌ただしく出ていく。

斎藤の声「武田も、前島も、荻原も、メガネも相変わらずだ。若葉寮はお前がいなくなってずいぶん

寂しくなったが、みんな仲良くやっている。学校と風紀委員会の風あたりは強いが、俺たちは

そんなことに負けはしない。この俺たちの城も卒業と同時に取り壊されることが決まったが

、
それまではこのオンボロ寮を守っていくつもりだ」

メガネが戻ってきてテーブルのイスに座る。前島がメガネにお茶を入れる。

○ 走る列車の中

窓辺に開かれたままの手紙。

食べた後のにぎり飯の包み。

斎藤の声「まあ、お前も落ち着いたら手紙でもくれ……」

居眠りをしているカケル。

車窓にのどかな景色が流れている。

終

薫風風来

<http://p.booklog.jp/book/109062>

著者：スワプナ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/831016/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109062>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109062>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ